女子文壇

二〇世紀初頭の若い女性たちにとって、ほとんど唯一の自己表現の場であり、『青鞜』の前身とも呼ぶべき女性文学・フェミニズムの原点！

【復刻版】全五四巻・別冊一

一九〇五(明治三八)年～一九二三(大正一二)年＝発行

渡邊澄子＝解説

菊判／上製／総約二万五〇〇〇ページ

揃定価＝本体九九万円＋税

推薦＝阿木津 英・飯田祐子・上笙一郎・竹盛天雄・米田佐代子

不二出版

女性文化の系譜
――復刻版刊行にあたって

『女子文壇』は一九〇五（明治三八）年に創刊された。日本最初の女性文学雑誌でありフェミニスト雑誌となった『青鞜』に先立つこと六年、二〇世紀初頭の若い女性たちの自己表現への渇望を存分に汲み上げた投稿雑誌である。編集は野口竹次郎と河井酔茗。

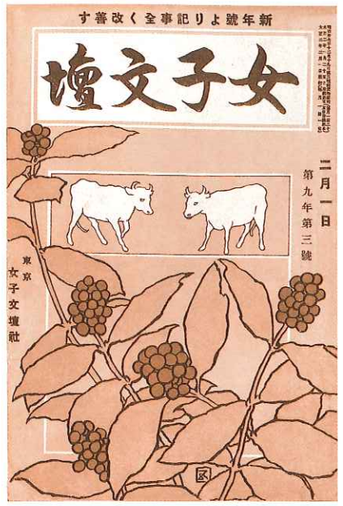
『女子文壇』を出発点として文壇に登場した女性は数多い。良く知られるのは水野仙子・今井邦子・生田花世・原阿佐緒・若山喜志子・原田琴子らで、広津柳浪・尾上柴舟・佐佐木信綱・巌谷小波などの評者に絶賛されている。ほかに尾崎翠・三ケ島葭子・鷹野つぎ・島本久恵・三宅やす子・三津木貞子・四賀光子などもここから巣立っていった。

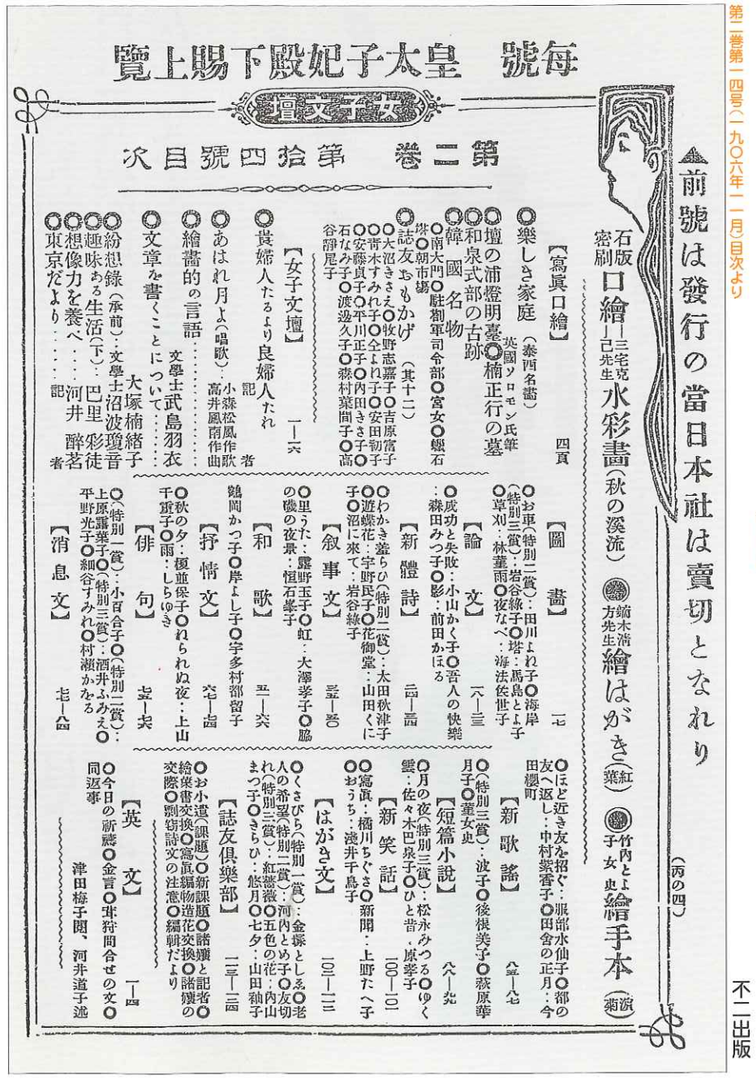
このように女性たちにとって「文壇への登竜門」であったと同時に数少ない表現の場として大きな役割を果たしたことも見逃せない。『女子文壇』に集った女性たちのなかから必ずしも文学への道を選ばずに社会に影響を与える者も多く輩出しているのである。

水平運動に挺身した糸若柳子、社会主義者・九津見房子、妹水野仙子と競うように投稿し、のちにクリスチャンの医師として草津のバルナバ病院でハンセン病患者を診る服部今朝子、労働運動の活動家・小見山富恵、新聞記者・日陰茶屋事件を経て戦後国会議員となる神近市子、教員となり兄・深尾韶と雑誌『女教師』を刊行する静岡の深尾けん、探訪記事を書く新聞記者として名を上げ華麗奔放な生涯で知られるエッセイスト・女優の中平（宮田）文子、職業婦人運動を経て戦後国会議員となる新妻イト、長野県で初めての女性新聞記者となるが早世した安孫子美子――などなど。

大正デモクラシー前夜に開花した一〇代の女性たちのマグマのような熱い思いがあふれる本誌は、女性文化の原点ともいうべき多くの可能性を秘めた資料である。名のみ高く、その実態がほとんど明らかになっていない本誌を復刻し、文学研究のみならず、近代教育史、女性史、女性文化史研究に寄与するものである。

不二出版





毎號　皇太子妃殿下賜覽

女子文壇

第二卷　第拾四號目次

石版密刷口繪―三宅克己先生　水彩畫（秋の溪流）　縮木清方先生　繪はがき（紅葉）　竹内とよ子女史　繪手本（源氏）

【寫眞口繪】　四頁
◎樂しき家庭（泰西名畫）英國ソロモン氏筆
◎壇の浦燈明臺◎楠正行の墓
◎和泉式部の古跡
◎韓國名物
○南大門○駐劄軍司令部○宮女○鰐石
塔○朝市場
◎誌友ともかげ（其十二）
○大沼きさえ○牧野志嘉子○吉原富子○菁木すみれ子○全より子○安田初子○石なみ子○安藤貞子○平川正子○内田きさ子○谷靜尼子○渡邊久子○森村紫間子○高

【圖畫】　一七
○お車（特別二賞）：田川よれ子○海岸（特別三賞）：岩谷綠子○塔：馬島とよ子○草刈：林菫雨○夜なべ：海法佐世子

【論文】　八一三
○成功と失敗：小山かく子○吾人の快樂：森田みつ子○影：前田かほる

【新體詩】　二四―二五
○わかき蓋らひ（特別二賞）：太田秋津子○遊蝶花：宇野民子○花御堂：山田くに子○沼に來て：岩谷綠子

【敍事文】　三五―三六
○里うた：露野玉子○虹：大澤孝子○脇の磯の夜景：恒石孝子

【和歌】　三一―六六
鶴岡かつ子○岸よし子○宇多村都留子

【抒情文】　六七―七四
○秋の夕：榎並保子○れられぬ夜：上山千賀子○雨：しらゆき

【俳句】　七五―七六
○紛想錄（承前）：文學士沼波瓊音
○趣味ある生活（下）：巴里彩徒
○想像力を養べ……：河井酔茗記

【女子文壇】　一一六
○貴婦人たるより良婦人たれ　小森松風作歌　高井鳳閣作曲者
○あはれ月よ（唱歌）：
○繪畫的の言語……
○文章を書くことについて……：文學士武島羽衣　大塚楠緒子

【新歌諸】　八五―七七
○（特別三賞）：波子○後祝美子○森原華月子○葦女史

【短篇小說】　八六―九六
○月の夜（特別三賞）：松永みつる○ゆく雲：佐々木巴泉子○ひと昔：原孝子

【新笑話】　一〇〇―一〇一
○寫眞：橋川ちぐさ○新聞：上野たへ子○おうち：澁井千鳥子

【はがき文】　一〇二―一一三
○くさびら（特別一賞）：金藤とし子○老人の希望（特別二賞）：河内とめ子○友切れ（特別三賞）：紅葉會○五色の花：内山まつ子○きちひ：悠月○七夕：山田勉子

【誌友倶樂部】　一一三―一一四
○お小遣（課題）○新課題○諸嬢と記者○繪葉書交換○寫眞編物造花交換○諸嬢の交際○剽窃詩文の注意○編輯だより

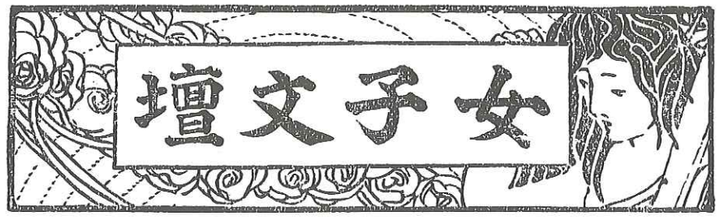
【英文】　一一四
○今日の所感○金言○雀狩問合せの文○同返事

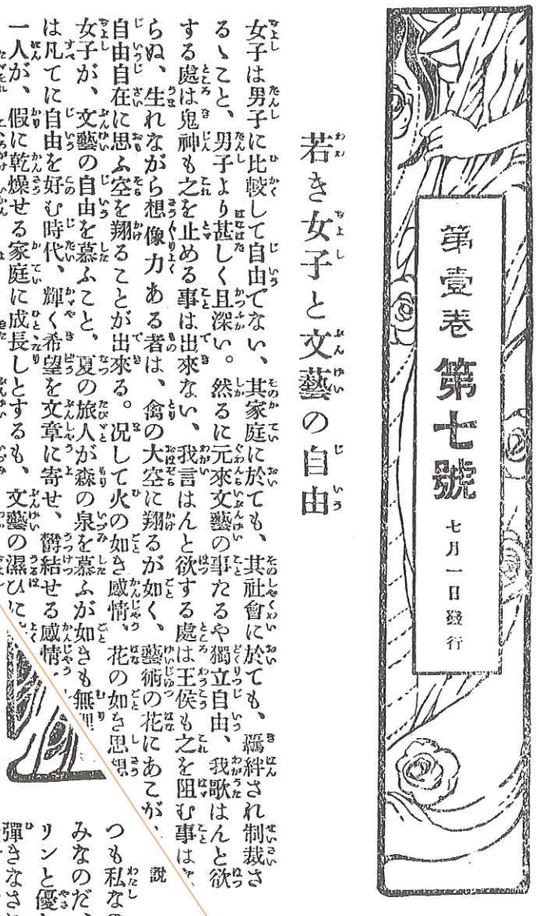
【消息文】　一一七―一八四
○ほど近き友へ招く：服部水仙子○郵の友へ返し：中村紫雪子○田舍の正月：今田櫻町

（西の四）

前號は發行の當日本社は賣切となれり

第二卷第一四号（一九〇六年一一月）目次より




第壹卷　第七號　七月一日發行

若き女子と文藝の自由

女子は男子に比較して自由でない、其家庭に於ても、其社會に於ても、羈絆され制裁さるゝこと、男子より甚しく且深い。然るに元來文藝の事たるや獨立自由、我歌はんと欲する處は王侯も之を阻む事はならぬ、生れながら想像力ある者は、禽の大空に翔るが如く、藝術の花にあこがれ、自由自在に思ふ空を翔ることが出來る。況して火の如き感情、花の如き思想、女子が、文藝の自由を慕ふこと、夏の旅人が森の泉を慕ふが如きも無理は凡てに自由を好む時代、輝く希望を文章に寄せ、醫結せる感情、一人が、假に乾燥せる家庭に成長しとするも、文藝の濕ひに、只夫は、心掛の如何に由る。來れ、文藝の泉に。若き女子は宜しく蔓の如くなれ、其躰に於ても、しき顔の、愛嬌を缺くが如し、所詮文藝は一種の、女子として純潔無垢、然かも愛の權化を知る以上は、諸嬢の信仰や高く、思想、

――（八四）――

岩代須賀川本町　服部水仙

奥様の琴

内の奥様此頃はさつぱりお琴をお弾さなさらない去年の二月に旦那様が、お出征になつてから此方。丁度あれは二月の九日であつた、旦那様が明日はお出征と云ふ前の晩、大層よいお月夜の晩であつたが、旦那様と奥様と、琴と笛の合奏をなすつた。悲しい様な哀れな様なお歌で……蔭で聞いていた私達も思はずホロリとしたのであつた。

其の時から少しもお琴にお手を、お觸れなさらない。何故とお聞き申ても、たゞ微笑なさるばかりで、それでもお琴は大層お大切になさる。毎朝お掃除の役はいつも私なのだ、それがまた私に取つて、此上無い樂しみなのだ、私の樣な者がはたきで敲いてもコロンコロリンと優しい音を立てる。それだのに、あゝ奥樣がお彈さなされたなら……

今年も最早秋になつた。相變らず毎朝お掃除するお琴は怨めしい音を立てる樣になつたが、奥樣は如何な淋しい日でも決してお琴をお彈さなさらない。朋輩のお竹どんはいつもこふ云ふのだ「奥樣は旦那樣が丈夫でお歸りになつてまた合奏をなさるのを待つて居らつしやるのだと。

お庭の青桐の一葉がサラ〳〵と散つて、降りそゝぐ雨の音淋しい、何となくもの淋しい日であつた。電報！の聲に私が受取つて、机に向つて何か考ひて居らつしゃる奥樣の前に差出した時、その時、幽かな震がお唇に昇ると見る間に、開かれたみ手はワナ〳〵と震ひ、お顔は眞青になつて、ワットばかり……あゝ、其時私は如何して宜いやらわからなかつた。やがてつと起つて佛間にお入りなされた奥樣は、やがて現はれた奥樣はあゝ舊の奥樣では無かつた。彼の房々としたみ髮は、根元からプツツリと……あゝ旦那樣は戰死なされたのだ！

澁柳浪選

〈内容見本〉
右＝巻頭言（第一巻第七号・一九〇五年七月）
下＝投稿欄・短編小説（第一巻第七号・一九〇五年七月）
服部水仙とはのちの水野仙子。広津柳浪の評に「傑作なり、一種の際物に相違ないけれど、戦争を客として、奥様の琴を主として、着想の清新なところ、幽玄なところ、人情も籠ってあれば、詩趣も含まれてある、上乗の作」とある。

〈推せんします〉五十言蘭

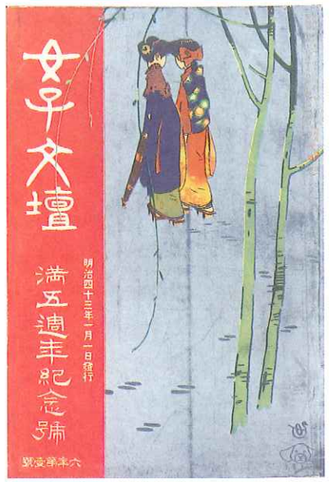
近代女性歌人第二世代誕生の場

阿木津 英〈歌人〉

草創期『明星』から出た与謝野晶子・山川登美子・茅野雅子を、近代女性歌人の第一世代とすると、今井邦子・若山喜志子・三ケ島葭子・原阿佐緒ら、第二世代の多くが『女子文壇』投稿時代をくぐっている。第一世代は大阪という都市を地縁として輩出したが、第二世代は、全国から投稿が寄せられた『女子文壇』という雑誌を機縁として誕生したといってもよい。

「女学生」という言葉があこがれのこもった新語であった時代、親の反対や経済事情で女学校に容易に進学できない向学心に燃えた少女たちは、『女子文壇』に投稿することで渇きをいやしたのである。今井邦子も若山喜志子も三ケ島葭子も、短歌のみならず、新体詩や散文に情熱を燃やした。そこで、のちの生田花世や水野仙子などとの交流も生まれ、今井邦子は生田花世と家出上京後の青春生活を共にしたりもするのである。

近年、歌壇では、三ケ島葭子再評価の動きが盛り上がっているが、今後、第二世代の女性歌人たちの再評価はさらになされなければならないだろう。『女子文壇』で作家として育ちあがった今井邦子は、女子文壇社から出した歌文集『姿見日記』や第一歌集『片々』に、家庭という女の現実にぶちあたった悲しみと怒りを、率直に切実にうたった。若山喜志子の第一歌集『無花果』も、そうである。



子・原田琴子・永代美知代・尾竹紅吉・内藤千代子・岡本かの子・杉田久女・瀬沼夏葉・原阿佐緒、その他その他。

しかし、文学史に登録されているこれらの姓名で『女子文壇』の投稿欄を当っても、その作品をすぐには探し当てられないだろう。なぜなら彼女たちは、結婚前の姓名、あるいは思春期心情に立ったセンチメンタルな雅号や筆名をもって、投稿していたからである。そして、それら情緒過剰な雅号や筆名そのものからして、近代日本の一時期の〈少女文化＝女性文化〉であったのだった。

『女子文壇』の投稿文を精査したら、右記のほかにも、後年の知名女性の文篇がどれほど載っているか分かって来るだろう。この雑誌は、近代日本の女性文学史・女性思想史・女性心情史の資料的宝庫なのである。古書店にも古書展にもなかなか出て来ないこの希覯雑誌の復刻は、研究者にとって、大いなる福音と言わなくてはならない。

（かみ・しょういちろう）

このような女性歌人たちの出発点を、このたびの復刻版によって、手近に見ることができるようになったのは、じつにありがたい。

（あきつ・えい）

無名の少女たちが経由した「文学」

飯田祐子〈神戸女学院大学助教授〉

「文学」と女性の結びつきは、どのようなものであったのか。『女子文壇』は、その複雑な結びつきについて多くのヒントを与えてくれる雑誌である。唯一の女性向け文学投稿雑誌として『女子文壇』がつくりだす場に参加した少女たちは、読み、書き、そしてさらに読まれるという、言葉の流通する現場を体験することになる。そしてそれは、つながりあう少女たちを生徒に、編集者や記者を教師とした、一種のヴァーチャルな「学校」として機能しはじめていく。階層的にも地域的にもかなり多様な読者が集っているのだが、夢のように生まれたこの空間に注ぎ込まれるそれぞれの想いは、共鳴しあい、徐々に振幅を広げている。

「文学」は、アイデンティティを形成するうえで大きな役割を担うメディアであっただろう。少女たちが『女子文壇』で経験した熱い感情は、どのように彼女たちの生き方に影響を与えていったのか。見知らぬ仲間に出会い、外の世界とつながる経験は、「文学」という言葉におさまりきるものだったかどうか。愛読者のほとんどは、「無名」のまま生きた少女たちである。『女子文壇』は、そうした無名の少女たちが、何を想い、何を望み、どこへ向かおうとしていたのか、あるいは、何を悲しみ、何をあきらめ、何を伝えようとしたのか、「文学」を経由しながら、私たちにそうした少女たちに向かう問いを与える熱さを秘めている。

（いいだ・ゆうこ）

女性文学・思想・心情史の宝庫

上笙一郎〈児童文化研究家〉

児童文学の研究者であり、また、つれあい＝山崎朋子（女性史研究者）の影響で文学や思想の〈女流〉の歩みに関心をいだいているわたしは、『秀才文壇』（明治三十四年創刊）と『女子文壇』（明治三十八年創刊）というふたつの投稿的雑誌に、ずいぶんと心をもちいて来た。――なにしろ、野口竹次郎・安治という兄弟が出したこれらの雑誌は、前者は近代日本最大の童話作家＝小川未明がその若き日に編集したものであり、殊に後者は詩人の河井酔茗が編集、近代日本文化における〈女性の創造者〉の多くを育てたからである。

『秀才文壇』は措いて『女子文壇』に限れば、ここに投稿してみずからの力を鍛えた女性として、以下のような人たちがある。――水野仙子・三宅やす子・三ケ島葭子・今井邦子・若山喜志子・杉浦翠子・生田花世・望月れい子・神近市子・若杉鳥子・鷹野つぎ・島本久恵・太田楽子・原田琴子・永代美知代・尾竹紅吉・内藤千代子・岡本かの子・杉田久女・瀬沼夏葉・原阿佐緒、その他その他。

しかし、文学史に登録されているこれらの姓名で『女子文壇』の投稿欄を当っても、その作品をすぐには探し当てられないだろう。なぜなら彼女たちは、結婚前の姓名、あるいは思春期心情に立ったセンチメンタルな雅号や筆名をもって、投稿していたからである。そして、それら情緒過剰な雅号や筆名そのものからして、近代日本の一時期の〈少女文化＝女性文化〉であったのだった。

『女子文壇』の投稿文を精査したら、右記のほかにも、後年の知名女性の文篇がどれほど載っているか分かって来るだろう。この雑誌は、近代日本の女性文学史・女性思想史・女性心情史の資料的宝庫なのである。古書店にも古書展にもなかなか出て来ないこの希覯雑誌の復刻は、研究者にとって、大いなる福音と言わなくてはならない。

（かみ・しょういちろう）

新しい眼による掘り起こしを！

竹盛天雄〈早稲田大学名誉教授〉

『女子文壇』の名は、わたくしにとって荷風作品の初出誌・紙の総ざらえをしていた頃（一九六〇年代初）、荷風の『最初の接吻』という挑戦的な題名の翻訳が載っていることを教えて下さった方があり、雑誌調査への蒙を啓かれた記憶につながっている。

『女子文壇』は、一九一〇年前後の文化状況の昂揚を背景に、詩人河井酔茗が編集主任の座にあって、若い女性たちに自分を尊重し、表現してゆくことを教え、作品発表の「場」を与えようとした女性のための文芸機関であった。文学界の息吹きを反映させるために、鷗外や漱石、鏡花、藤村、秋声、晶子ら、いろんな文学者たちの作品や女性の生き方をめぐる意見などを掲載する一方、若い女性の書き手を育て、小説・感想・詩歌など多くのジャンルにわたって発表の「場」を与えている。投書家・習作時代の作品を載せた彼女らの名として、三宅やす子・水野仙子・今井邦子・若山喜志子・生田花世・鷹野つぎ等々、多くがあげられるが、途中で筆を折ったり、埋れてしまった書き手たちの数は、数えきれないだろう。

本誌を披いてゆくと、書くこと・表現することに、彼女たちがどんな喜びを感じ、悩み、何を求めていたかに突き当らざるを得ない。「女子の文芸を奨励する」ことを目指した女子文壇という名の「場」は、今日、新しい眼によって掘り起こされることを待っているといわねばならない。復刻作業にあたって、河井（島本）家所蔵原本が主となるという。この意義ある仕事の成功を祈りたい。

（たけもり・てんゆう）

時代を生きた女性群像

米田佐代子〈女性史研究者〉

一九〇五年発刊の『女子文壇』は、しばしば一九一一年創刊の『青鞜』と比較される。それは、『青鞜』参加者に山田（今井）邦子や生田（西崎）花世など『女子文壇』出身者が少なくないところから『青鞜』の前身、とみる評価から、閨秀文学会以来平塚らいてう（明）の師といわれた生田長江が、『女子文壇』に対抗して女性作家を育てようとしたという説まで、さまざまである。一方『女子文壇』は、女性投稿者が尾上柴舟や河井酔茗といった男性選者によって選ばれ、育てられるという関係であったのに対し、『青鞜』は女性自身による自己表現の場であったことのちがいを重視するみかたも成り立つだろう。

ただ、いずれにせよ言えることは、日露戦争の最中に創刊され、大逆事件後の「冬の時代」を経て大正デモクラシーに手が届く時期まで続いたこの雑誌の全容が、これまでほとんど一般の目にふれることがなかった、という点である。『青鞜』も復刻されるまでは「伝説」の世界であった。それよりもはるかに分量の多い『女子文壇』が、たんに「女性作家の登竜門」というだけでなく、この時代にあって自ら書き手になることをめざし、書くことで経済的自立をも果たす女性群像を生み出したことの意味は、まだ明らかになっているとはいえない。今回の復刻を、近代日本女性史研究の立場からもおおいに期待したい。

（よねだ・さよこ）

〈不二出版刊行の関連図書・復刻版〉

平塚らいてう・伊藤野枝＝主宰

青鞜

○総52冊・別冊1

○明治44年～大正5年刊
○別冊＝解説（井手文子）・総目次・索引
○A5判・並製・函入、総8、824頁
○本体揃価格＝120、000円

「元始女性は太陽であつた」（平塚らいてう）「山の動く日来たる」（与謝野晶子）で知られる『青鞜』は、女性の自我・家からの解放を求め、近代日本の女性解放史の原点となった。

尾竹一枝＝主宰

番紅花

さふらん ○全6冊・別冊1

○大正3年3月～8月刊
○別冊＝解題（渡辺澄子）・総目次・索引
○菊判・並製・帙入・総1、408頁
○本体価格＝35、000円（特装版）

青鞜社を退社した尾竹一枝が、小林歌津、神近市子らとともに創刊した本誌は、東西の音楽、演劇、美術の紹介等、尾竹の初々しい興味と個性がいきた「純芸術雑誌」である。

福島四郎＝主宰

婦女新聞

○全68巻・付録2

○明治33年～昭和17年刊
○付録＝①「婦人界三十五年」②記事・執筆者索引
○B5・A5判・上製・総38、500頁
○本体揃価格＝1、000、000円

公娼廃止・母性保護・女子教育・婦人参政権など女性に関するありとあらゆることを四二年の長きにわたって報道し論じた貴重資料の復刻版。

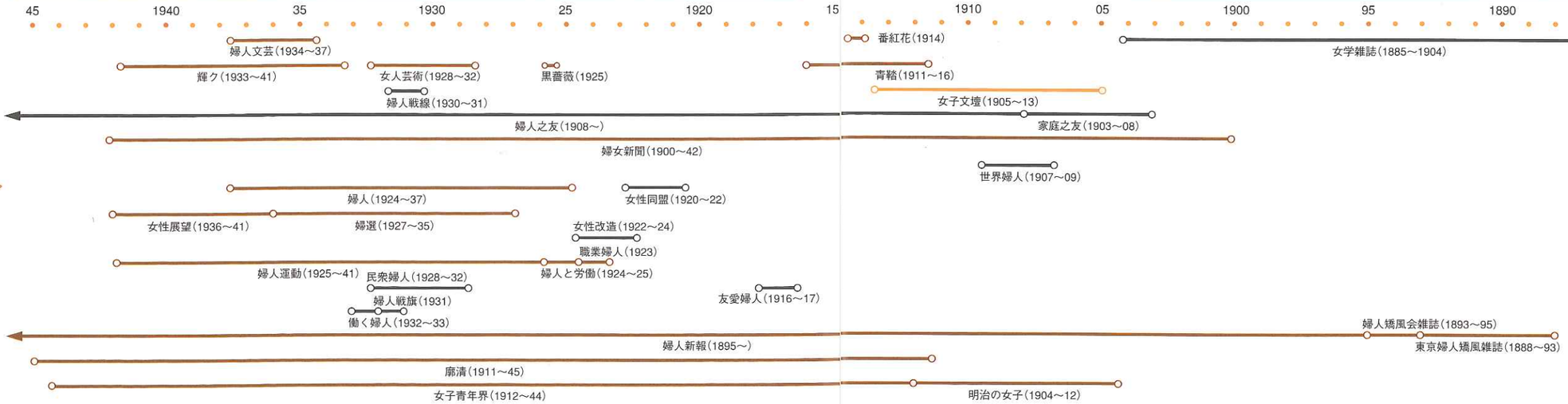
全関西婦人連合会＝刊

婦人

○全24巻・別冊1

○大正13年～昭和12年刊
○別冊＝解説（藤目ゆき）・総目次・索引
○B5判・上製・総9、860頁
○本体揃価格＝480、000円

西日本全域の女性三〇〇万人もの会員を擁し、戦前では世界でも最大規模の女性団体だった全関西婦人連合会の機関誌。差別的な法律の改正・廃娼運動・婦選運動等女性問題に取り組んだ。



〈戦前女性運動 雑誌・機関誌の系譜〉

長谷川時雨＝主宰

輝ク

○全2巻・別冊1

○昭和8年～昭和16年刊
○第一巻＝『輝ク』全一〇二号
○第二巻＝『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』
○別冊＝回想（若林つや）・解説（尾形明子）・総目次・索引
○B5判・A5判・上製・函入・総1、278頁
○本体揃価格＝25、000円

長谷川時雨が組織した「輝く会」の機関誌である本誌は、当時のほとんどすべての女性作家・思想家・芸術家が原稿や近況を寄せ、十五年戦争下の女性文化人の状況を照らし出す。

吉屋信子＝主宰

黒薔薇

くろしょうび ○全1巻

○大正14年1月～8月刊
○解説（上笙一郎）・総目次
○四六判・上製・総630頁
○本体価格＝20、000円

若い女性に圧倒的な支持を得ていた、フェミニスト作家の先駆・吉屋信子が自ら創刊した個人雑誌。性差別社会を撃ち、同性愛を堂々と謳った本誌は、吉屋の真骨頂を示す最重要資料。

日本キリスト教婦人矯風会＝刊

婦人新報

○全60巻・別冊1

○明治21年～昭和33年刊
○別冊＝解説（五味百合子）・総目次・索引
○菊判・上製・総30、000頁
○本体揃価格＝840、000円

日本で最も古い歴史をもつ女性団体＝日本キリスト教婦人矯風会の廃娼運動・婦人参政権運動など人権・女権運動の轍を辿る基礎資料。

神近市子＝主宰

婦人文芸

○全10巻・別冊1

○昭和9年～昭和12年刊
○別冊＝解説（黒澤亜里子）・総目次・索引
○菊判・上製・函入・総6、362頁
○本体揃価格＝150、000円

女性文芸雑誌が相次いで終刊になった昭和一〇年代、女性の表現の場として求められた本誌は、単なる文芸雑誌に終わらず、フェミニズムを意識した雑誌となっている。

日本キリスト教女子青年会＝刊

女子青年界

○全33巻・別冊1

○明治37年～昭和25年刊
○別冊＝解説（武田清子）・総目次・索引
○A5判・B5判・上製・総21、866頁
○本体揃価格＝748、000円

女性のための寄宿舎事業、託児所設置、婦人問題に関する調査・研究、女工・女中の生活教育などを一貫して行った日本YWCAの活動を克明に記録。

奥むめお＝主宰

婦人運動

○全30巻・別冊1

○大正12年～昭和16年刊
○別冊＝解説（鈴木裕子）・総目次・索引
○A5判・B5判・上製・総9、938頁
○本体揃価格＝300、000円

常に生活者であり労働者である女性の立場にたち、「婦人消費組合協会」「婦人セツルメント」「働く婦人の家」設立などに尽力した職業婦人社の、女性の連帯を求めた運動の記録。

女子文壇

復刻版概要

●体裁＝菊判／上製／総約二万五〇〇〇ページ
●揃定価＝本体九九万円＋税
●別冊＝解説（渡邊澄子）・総目次・索引（これのみ分売可、本体一八、〇〇〇円）
●配本＝全十二回配本＝二〇〇二年六月～二〇〇五年八月

配本	復刻版巻数	原本巻（年）号	原本発行年月	配本年月 本体価格	ISBN
第一回＝第1巻	第1巻	第一巻第一号～第三号	明治三八年一月～三月	＝二〇〇二年六月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5000-2
	第2巻	第一巻第四号～第六号	明治三八年四月～六月		
	第3巻	第一巻第七号～第九号	明治三八年七月～九月		
	第4巻	第一巻第一〇号～第一二号	明治三八年一〇月～一二月		
	第5巻	第二巻第一号～第三号	明治三九年一月～二月		
第二回＝第6巻	第6巻	第二巻第四号～第七号	明治三九年三月～五月	＝二〇〇二年九月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5006-1
	第7巻	第二巻第八号～第一〇号	明治三九年六月～八月		
	第8巻	第二巻第一一号～第一三号	明治三九年八月～一〇月		
	第9巻	第二巻第一四号～第一六号	明治三九年一一月～一二月		
	第10巻	第三巻第一号～第三号	明治四〇年一月～二月		
第三回＝第11巻	第11巻	第三巻第四号～第六号	明治四〇年三月～五月	＝二〇〇二年一二月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5012-6
	第12巻	第三巻第七号～第九号	明治四〇年五月～七月		
	第13巻	第三巻第一〇号～第一二号	明治四〇年八月～九月		
	第14巻	第三巻第一三号～第一六号	明治四〇年一〇月～一二月		
	第15巻	第四年第一号～第三号	明治四一年一月～二月		
第四回＝第16巻	第16巻	第四年第四号～第六号	明治四一年三月～四月	＝二〇〇三年四月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5018-5
	第17巻	第四年第七号～第九号	明治四一年五月～六月		
	第18巻	第四年第一〇号～第一二号	明治四一年七月～八月		
	第19巻	第四年第一三号～第一五号	明治四一年九月～一〇月		
	第20巻	第四年第一六号～第一八号	明治四一年一一月～一二月		
第五回＝第21巻	第21巻	第五年第一号～第二号	明治四二年一月～二月	＝二〇〇三年八月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5024-X
	第22巻	第五年第三号～第四号	明治四二年二月～三月		
	第23巻	第五年第五号～第六号	明治四二年四月～五月		
	第24巻	第五年第七号～第八号	明治四二年五月～六月		
	第25巻	第五年第九号～第一〇号	明治四二年七月～八月		
第六回＝第26巻	第26巻	第五年第一一号～第一二号	明治四二年八月～九月	＝二〇〇三年一二月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5030-4
	第27巻	第五年第一三号～第一四号	明治四二年一〇月～一一月		
	第28巻	第五年第一五号～第一六号	明治四二年一一月～一二月		
	第29巻	第六年第一号～第二号	明治四三年一月～二月		
	第30巻	第六年第三号～第四号	明治四三年二月～三月		
第七回＝第31巻	第31巻	第六年第五号～第六号	明治四三年四月～五月	＝二〇〇四年四月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5036-3
	第32巻	第六年第七号～第八号	明治四三年五月～六月		
	第33巻	第六年第九号～第一〇号	明治四三年七月～八月		
	第34巻	第六年第一一号～第一二号	明治四三年八月～九月		
	第35巻	第六年第一三号～第一四号	明治四三年一〇月～一一月		
第八回＝第36巻	第36巻	第六年第一五号～第一六号	明治四三年一一月～一二月	＝二〇〇四年八月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5042-8
	第37巻	第七年第一号～第二号	明治四四年一月～二月		
	第38巻	第七年第三号～第四号	明治四四年二月～三月		
	第39巻	第七年第五号～第六号	明治四四年四月～五月		
	第40巻	第七年第七号～第八号	明治四四年六月～七月		
第九回＝第41巻	第41巻	第七年第九号～第一〇号	明治四四年七月～八月	＝二〇〇四年一二月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5048-7
	第42巻	第七年第一一号～第一二号	明治四四年九月～一〇月		
	第43巻	第七年第一三号～第一五号	明治四四年一〇月～一二月		
	第44巻	第八年第一号～第二号	明治四五年一月～二月		
	第45巻	第八年第三号～第四号	明治四五年三月～四月		
第十回＝第46巻	第46巻	第八年第五号～第六号	明治四五年五月～六月	＝二〇〇五年四月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5054-1
	第47巻	第八年第七号～第八号	明治四五年七月～八月		
	第48巻	第八年第九号～第一〇号	明治四五年九月～大正元年一〇月		
	第49巻	第八年第一一号～第一二号	大正元年一一月～一二月		
	第50巻	第九年第一号～第二号	大正二年一月		
第十一回＝第51巻	第51巻	第九年第三号～第四号	大正二年二月～三月	＝二〇〇五年八月 九〇、〇〇〇円	ISBN4-8350-5060-6
	第52巻	第九年第五号～第六号	大正二年四月		
	第53巻	第九年第七号～第八号	大正二年五月～六月		
	第54巻	第九年第九号～第一一号	大正二年七月～八月		
	別冊	解説・総目次・索引			

●二〇〇五年刊行分＝一八〇、〇〇〇円

●二〇〇二年刊行分＝二七〇、〇〇〇円

●二〇〇三年刊行分＝二七〇、〇〇〇円

●二〇〇四年刊行分＝二七〇、〇〇〇円

表示価格は、全て税別。
二〇〇二・五

不二出版（株）
〒113・0023東京都文京区向丘1・2・12
電話〈03〉3812・4433
ファクシミリ〈03〉3812・4464
振替00160・2・94084